

『西行法師家集』本文考

——諸伝本の大別グループ分けに関わる所載歌と歌順の吟味——

斐 慶 娥

西行の家集の一つである『西行法師家集』は、周知のように、石川県立

図書館蔵李花亭文庫本（藤岡作太郎氏旧蔵）が、藤岡作太郎氏によって早くに『異本山家集』（明治三十九年刊）に翻刻・公刊されて以来、善本とされ、『私家集大成3中世1』（昭和四十九年刊）所収「西行上人集」（糸賀きみ江氏担当）、『新編国歌大観3私家集編1』（昭和六十年刊）所収「西行法師家集」（山木幸一氏担当）等の多くの公刊テキストの底本として用いられ、この集の代表本文となっている。現在、この集の伝本は、諸先覚の調査によって、室町期の書写本をはじめ、写本が四十余本ほど、版本が延宝二年版行として三十余本ほど、その所存が報告され、一部はその本文が影印・翻刻・校異の形で提示されている。伝本分類を含む詳細な伝本研究としては高城功夫氏¹⁾、寺澤行忠氏の御論考²⁾があり、『西行法師家集』伝本は所載歌・本文等の差異によって大別三系統に分けられることが高城氏によって説かれ、寺澤氏によって追認された。さらに、寺澤氏は、個々の伝本の精査のうえで、善本を一本に定めることはできないと指摘し、比較的善本と認められる諸本を比較・検討し、この集の正しい本文を定める必要があると提言しておられる。『西行法師家集』伝本・本文についての研究は、李花亭文庫本という古写本の発見とその本文の公刊から始まり、諸伝本についての所在報告・本文の公刊・系統論がなされ、李花亭文庫本一

本を以て代表本文とする現状への疑問が呈される段階に至っているのである。

本稿は、『西行法師家集』諸伝本における本文流伝の実態を追求し、以て、この集として信頼し得る本文についての私見を提示することを目指す。検討の一端として、まず『西行法師家集』諸伝本間の本文関係について、諸伝本の別グループ分けに関わる所載歌と歌順を具体的に比較吟味し、検討するものである。

管見に入った『西行法師家集』伝本は以下の通りである。本稿における略号を掲げ、所載歌数を提示しておく。

略号 所蔵者等…歌数

延宝 延宝二年版行本（調査底本）…五九二（内重出四首）

三原 三原市立図書館蔵本…五九二（内重出四首）

東二 東京大学国文学研究室蔵（中世11・112）本…五九二（内重出四首）

河野 今治市河野美術館蔵本…五九二（内重出四首）

岩国 岩国徴古館蔵本…五九一（内重出四首）

犬井 犬井善壽氏蔵本…五八九（内重出三首）

山内 高知県立図書館蔵山内文庫本…五八三（内重出四首）、他に補入一首

石川 石川県立図書館蔵李花亭文庫本…五八一（内重出四首）、巻末落丁か

和学 内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本…五六八（内重出三首）、落丁アリ

葉室 宮内庁書陵部蔵葉室文庫本…六〇〇（内重出六首）

国学 國學院大学図書館蔵本…六〇〇（内重出五首）

東史 東京大学史料編纂所蔵本…五九七（内重出五首）

伊長 久保田淳氏蔵伝甘露寺伊長筆本…五九五（内重出二首）

共立 共立女子学園図書館蔵本…五九三（内重出四首）

中央 中央大学国文学研究室蔵本：五九二（内重出一首）

昌平 内閣文庫蔵昌平坂学問所旧蔵本：五八九（内重出三首）

東一 東京大学国文学研究室蔵（命世11・11）本：五八〇（内重出四首）、他に補入三首、落丁アリ

李花 石川県立図書館蔵李花亭文庫本：五七九（内重出一首）、一追而加書西

行上人和再次第不同（一八九首）を付載

東急 大東急記念文庫蔵本：五六五（内重出三首）、落丁アリ

慶応 慶応義塾大学図書館蔵本：五四二（内重出三首）

吳天 天理図書館蔵吳天炳氏旧蔵本：五三二（内重出一首）、落丁アリ

細川 細川文庫蔵本：五九五（内重出五首）、他に補入二首（同筆）

東奥 東奥義塾高等学校蔵本：五九四（内重出三首）、他に補入四首

天理 天理図書館蔵本：五九〇首（内重出一首）、他に補入二首

書陵 宮内庁書陵部蔵篋園文庫本：五八四（内重出三首）、他に補入三首

天文 伊藤嘉夫氏蔵天文七年書写本：五八四（内重出六首）

日大 日本大学総合学術情報センター蔵本：四五四（内重出一首）、他に補入七首、下句欠脱補入一箇所、上句欠脱補入一箇所、落丁アリ

こう見ると、『西行法師家集』管見諸本は、葉室・国学本の六〇〇首から山内本の五八三首まで様々で、伝本により多少の差異がある。なかには、慶応本の五四三首という具合に大幅に歌数の少ない本もある。かような歌数の違いから、所載歌の揺れが生じていることが知られる。春・夏・秋・冬・恋・雑という部類に相違はないが、

以下、諸伝本が大別グループに分けられる歌の載・不載と歌順の差異の吟味から、所載歌に見られる諸伝本間の関係を確認しておきたい。

二

『西行法師家集』管見諸本のうち、延宝・三原・東二・河野・岩国・犬井・石川・和学・山内本（以下、延宝本等の諸本）には、他の諸本には載る歌が共通して欠けている箇所が少なくない。まずその歌の載・不載を例示し、検討する。

延宝本等の諸本は、他の諸本には載る、

花

- 葉室 三七 君こそは霞にけふも暮なまし花まちかぬる物がたりせよ
- 葉室 三八 吉野山さくらが枝に雪散て花をそげなる年にも有かな
- 葉室 三九 山さむみ花さくべくもなかりけりあまりかねてぞ尋来にけり
- 葉室 四〇 山人に花さきぬやとたづぬればいさしら雲とこたへてぞ行
- 葉室 四一 よし野山こそ折の道かへてまだ見ぬかたの花をたづねん
- 葉室 四二 吉野山人に心をつけがほに花よりさきにかゝるしら雲
- ①葉室 四三 さきやらぬ物ゆへ兼て物ぞおもふ花に心のたえぬならひに
- 葉室 四四 花をまつ心こそなを昔なれ春にはうとくなりにし物を
- 葉室 四五 かたばかりつぽむと花を思ふより空又風の物になるらむ

（上方に、拠った本の略号・歌番号を示しておく。傍線は稿者。以下同じ）
 の内の①四三番の歌を欠いている。いずれであっても不自然ではない。いずれが本来的か決め手はないが、三七番からこの歌の直前の四二番までの歌の配列を手懸かりとして考えてみたい。冒頭から四二番まで、「待花」の主題を軸として、花時でない事柄に対して、語り手が「花待ちかぬる物語りせよ」（三七番、前又は後の歌との連鎖関係が考えられる表現や事柄に点線を施した。以下同じ）と呼びかけ、「花遅げなる年にも有るかな」（三八番）と感じ取り、「山寒み花咲くべくもなかりけり」（三九番）と気づき、

「山」に「あまりかねてぞ尋ね来にける」(三九番)と自覚し、開花の気配を「山人に花咲きぬやと尋ねれば」(四〇番)と問ひ、「吉野山」の「まだ見ぬ方の花を尋ねん」(四一番)と決意し、「吉野山」の「花より先にかかる白雲」(四二番)の様子を「人に心を付け顔に」(四二番)と感受する、というふうには、相互に連関した内容や表現の歌が前後して並んで、一続きに繋がっている。①四三番の歌は、「花に心の絶えぬ習ひ」で、まだ「咲きやら」ないものの、「兼ねて(花についての)物ぞ思ふ」と叙述されるものであり、直前の四二番の歌と内容や表現が連鎖している。この歌を欠く本文でも矛盾はないが、この歌を載せる本文のほうが、かような配列具合からして、妥当である。

月

- 葉室一七三 身にしみてあはれしらする風よりも月にぞ秋の色はみえける
- 葉室一七四 待いでくまなき宵の月みれば雲ぞ心に先かゝりける
- 葉室一七五 いかによや残りおほかる心ちして雲にはづるゝ秋の夜の月
- 葉室一七六 うちつけに又こむ秋の今夜まで月ゆへ惜くなる命かな
- 葉室一七七 人も見ぬよしなき山の末までに住らん月の影をこそ思へ
- 葉室一七八 中く心に心尽もくるしきにくもらばいりね秋の夜の月
- 葉室一七九 夜もすがら月こそ袖にやどりけれ昔の秋をおもひ出れば
- ②葉室一八〇 播磨がたなだのみ沖に漕出て西に山なき月をみるかな
- 葉室一八一 わたの原浪にも月はかくれけり都の山をなにいとふらん
- 葉室一八二 哀しる人見たらばと思かな旅ねの袖にやどる月かけ
- ②一八〇番の歌が、延宝本等の諸本には載らないが、他の諸本には載っている。いずれが本来的かは断じ難いが、この歌を載せる本文が、前に位置する一七三番から一七九番までの歌の配列と照合して、より妥当であると判断される。まず一七三番から一七八番まで、「月」に対して、語り手

が「風よりも」「(秋の)哀れを知ら」せるもの(一七三番)と認識する歌から始まり、明月に対する語り手の思いが示される歌へ移つる。明月を詠んだ五首は、語り手の明月への心情が、や々と出た「隈なき月」を「雲ぞ心に先かかりける」(一七四番)と懸念し、「雲にはづるゝ秋の夜の月」を「いかにぞや残りおほかる心地して」(一七五番)と不審に思い、来秋の「今宵まで」「(明)月ゆへ惜しくなる命かな」(一七六番)と願望し、「人も見ぬよしなき山の末までに住んで澄んでいろう」月の影こそ思へ、(一七七番)と執着し、晴れないかと「心尽くすも」かえって「苦しきに」「曇らば入りね秋の夜の月」(一七八番)と気をもみやきもきする、というふうには、展開していく。続く一七九番から一八二番まで、一七八番の歌の「心尽くすも苦しきに」と連関した「夜もすがら月こそ袖(の涙)に宿りけれ」(一七九番)とある歌から始まり、この歌の「昔の秋を思い出れば」という設定と連関した旅の月の歌へ移る。旅の月を詠んだ三首は、一首目の②一八〇番の歌を欠く本文でも不自然ではないが、②一八〇番の歌「播磨湯灘のみ沖に漕ぎ出でて(月が沈む)西に(月が入る)山なき月を見るかな」があつて、その内容と連鎖する、「わたの原波にも月は隠れけり」と気付き、「都の(月を隠す西)山をなに厭ふらん」と述べる内容の一八一番の歌が接続する本文のほうが、配列が密である。一七三番から一七九番までの配列がそうであるように。

(恋)部、詞書なし

- 葉室三三三 身をしれば人のとがとはおもはぬに恨みがほにもゆるゝ袖かな
- 葉室三三四 かゝる身におほしたてけむたらちねの親さへつらき恋もする哉
- 葉室三三五 とにかくにいとはまほしき世なれども君が住にもひかれぬるかな
- ③葉室三三六 むかはらばわが敷のむくゐにて誰ゆへ君が物をおもはむ
- 葉室三三七 あやめつゝ人しるとてもいかせむ忍びはつべき袂ならねば

葉室三二八 けふこそはけしきを人にしられぬれさてみやは思ひ餘るに

葉室三二九 物おもへば袖にながる涙川いかなるみ世にあふせありなむ

葉室三三〇 もらさじと袖にあまるをつまし情をしのぶ涙なりせば

④葉室三三一 ことづけて今朝の別はやすらはむ時雨をさへや袖にかくべき

葉室三三二 消えかへりくればまつ袖ぞしほれぬるをきつる人は露ならねども

葉室三五六 人はうし歎は露もなぐさまずさはこはいかにすべき思ひぞ

葉室三五七 うき世にはあらはあるにまかせつゝ心にいたく物なおもひそ

葉室三五八 いまさらに何と人めをつゝむらんしほらは袖のかはくべきかは

葉室三五九 うき身しる心にもぬ涙かなうらみむとしもおもはぬ物を

⑤葉室三六〇 などか我ことのほかなる歎せでみさほなるみにむまれざりけむ

延宝本等の諸本が、他の諸本には載っている③三二六番・④三三二番・

⑤三六一番の歌を欠いている。この三首を載せる本文は、「誰ゆゑ君が物

を思はん」とある③三二六番の歌が「君が住むにもひかれぬるかな」とあ

る直前の三二五番の歌と、「時雨をさへや袖にかくべき」とある④三三二

番の歌(後朝)が「暮れ待つ袖ぞしほれぬる」とある直後の三三二番の歌

(後朝)と、「みさをなりける我涙かな」とある⑤三六一番の歌が「みさ

をなる身に生れざりけむ」とある直前の三六〇番の歌と、それぞれ表現や

設定等の関連を持っている。この三首が不載であっても不都合はないが、

この三首を載せる本文のほうに、右に掲出した三三三番・三三四番・三三

七番・三三〇番・三五六番・三五九番の歌においても、点線で示すように、

二首ずつさような組み合わせとなっている点で、適切であると見る。

(述懐の心を)

国学五四四 あらはさぬわが心をぞうらむべき月やはうときおぼすて山

⑥国学五四五 たのもしな君くしますおりにあひて心の色を筆にそめつる

国学五四六 今よりはいとほし命あればこそかゝるすまみの哀をもしれ

.....

国学五四九 山ざとにうき世いとほん友もがなくやくしく過しむかしかたら

ん (葉室は歌順異なる)

国学五五〇 あし引の山のあなたに君すまば入とも月をおしまざらまし

⑦国学五五一 山ざとは人こさせじとおもはねどとはるゝことぞうとく成ゆ

く (季花は歌順異なる)

⑧国学五五二 うき世いとふ山のおくへもしたひきて月ぞ栖の哀をはしる

国学五五三 朝日まつ程はやみにやまよはまし在明の月の影なかりせば

延宝本等の諸本は、他の諸本が載せる⑥五四五番の歌を欠いている。い

ずれであっても不当ではなく、いずれが本来かは決めがたい。また、⑦五

五一番・⑧五五二番の二首の歌が、延宝本等の諸本で欠けているが、他の

諸本では載っている。いずれであっても不自然ではないが、この二首を連

続して欠く本文は、「あし引の」の歌を書写した時点で、直前の「山ざと

に」の歌と直後の「山ざとは」の歌の初句の「山ざと」(現に、表記まで

一致する本が多くある)の語によって目移りした結果、二首とも脱した、

という単純な誤脱の可能性が考えられる。

例①から⑧まで例示したように、延宝本等の諸本は、他の諸本には載る

八首の歌が不載であるが、その巻末には一石川本は巻末落丁のため、歌の

載・不載が不明ではあるが、他の諸本に載らない三首の歌を載せる。延

宝本によってその本文を掲げると、

太神宮御祭日よめるとあり

⑨五九〇 何事のおはしますをばしらねどもかたじけなさに涙こぼるゝ

⑤五九一 かさはあり其みのいかに成ぬらんあはれなりける人の行末

⑥五九二 さらば又それはしわたす心地しておぶさかゝれるかづらきの山

である。寺澤氏、犬井善壽氏が指摘されるように、その本文に不審がある。すなわち「太神宮御祭日よめる」という詞書が「とあり」と記述されているが、この集の他の詞書で「とあり」と述べて載るものはない。二首目の歌は無常を詠んだものであり、詞書と内容が合わない。それに続く一言主神の伝説を踏まえた三首目の歌も同様である。右に掲げた三首の歌は、さような齟齬があること、巻末で追筆しやすしい位置にあることから、転写の間に後人が本文に付け足して書き入れたものが本文化したと見てよい。

配列順序の点でも、前掲した歌の載・不載の諸例と同様に、延宝本等の諸本と他の諸本とで相違することがある。その歌順の差異を検討する。

延宝本等の諸本において、

鹿

延宝二六〇 三笠山月さしのぼる影さへて鹿なき初る春日野々原

⑦延宝二六一 山里は哀なりとや人とはば鹿のなくねをきけとこたへん

延宝二六二 兼てよりこゝろぞいとすみのぼる月まつ峯のさほしかのこゑ

延宝二六三 小倉山麓の里を秋ぎりにたちもらさるゝさほしかのこゑ

のごとき歌順で載る⑦の二六一番の歌と二六二番の歌が、他の諸本では逆順になっている。すなわち「さし昇る」月の光が冴えて鹿が鳴き始めるといふ状況が示される歌と、雄鹿の声を聞くと月の出る前から心は「澄み昇る」という状況が示される歌とが、

葉室二六一 みかさ山月さしのぼる影さえて鹿鳴初る春日野の原

葉室二六二 兼てより心ぞいと澄のぼる月待嶺のさほしかのこゑ

の順で、山里の哀れ深さを知るものとして鹿の声を提示する歌と、小倉山の秋の哀れさを感じさせるものとして雄鹿の声を提示する歌とが、

葉室二六三 山ざとはあはれなりやと人とはば鹿の鳴音を聞とこたへよ

葉室二六四 をぐら山ふもとをこ悲る秋ぎりに立もらさるゝさほしかの聲の順で、それぞれ連続して並ぶ本文となっている。

延宝本等の諸本においては、

鹿

延宝二六〇 三笠山月さしのぼる影さへて鹿なき初る春日野々原

.....

延宝二六三 小倉山麓の里を秋ぎりにたちもらさるゝさほしかのこゑ

西忍入道……よし申つかはしたりける返事に

……かく申しける

延宝二六四 鹿のねや心ならねどとまるらんさらでは野べを皆見する哉

返事

延宝二六五 鹿のたつ野べの錦のきりはらは残おほかる心地こそすれ

田家鹿

⑧延宝二六六 小山田の庵ちかく鳴鹿のねにおどろかさされておどろかす哉

虫

延宝二六七 きりぐす夜さむに秋の成まゝによはるかこゑの遠さかり行
という位置に載る⑧二六六番の歌が、他の諸本では、

(鹿)

葉室二六四 をぐら山ふもとをこ悲る秋ぎりに立もらさるゝさほしかの聲

田家鹿

葉室二六五 小山田の庵ちかくなく鹿の音に驚かさされておどろかすかな

西忍寺入道(略)

葉室二六六 鹿の音や心ならねばとまるらんさらでは野べをみな見するかなと、位置を大幅に異にしている。他の諸本の本文は、「鹿」「田家鹿」と同じ題詠のものが一続きに繋がっており、円滑な配列となっている。『西行法師家集』は、概ね、同じ歌題の歌が纏められているが、その点でも不都合がない。元もとあつたのが、書写者が「小山田」の歌を誤って脱し、書写の途中でそれに気付き、書き入れたことで、延宝本等のごとき本文が生じたと見る。

例①から⑩までの諸例において、延宝・三原・東二・河野・岩国・犬井・石川・和学・山内本の諸本と葉室・国学・李花・呉天・東一・共立・東史・伊長・昌平・東急・中央・慶応・細川・日大・天理・天文・東奥・書陵本の諸本とで所載歌が相違する箇所を例示し、具体的に吟味した。その検討から、延宝本等の諸本より他の諸本のほうが適切な本文を有することが確認できた。例⑫⑬として掲出した歌順の差異の点でも、同様である。例①から⑩までの六首の歌が延宝本等の諸本で欠けている原因は判然としないが、目移りによる誤脱が想定し得る例⑦⑧、後人による加筆の例⑨⑩⑪、不注意による歌順の乱れと思われる例⑬は、延宝本等の諸本における本文不備と見てよい。

三

前節の諸例から、細川・日大・天理・天文・東奥・書陵本（以下、細川本の諸本）は、所載歌と歌順の点で、葉室・国学・李花・呉天・東一・共立・東史・伊長・昌平・東急・中央・慶応の諸本（以下、葉室本等の諸本）と一致し、延宝本等の諸本とは一致しないということが明らかにできたが、実は、この六本が、葉室本等の諸本と延宝本等の諸本には載る歌を共

通して欠くことが二箇所ある。以下、例示し、検討するとおりである。

初春

- 延宝 一 岩間とぢしこほりも今朝はとけ初て昔の下水道もとむなり
- 延宝 二 降つみし高根の深雪とけにけり清瀧川の水のしらなみ
- 延宝 三 立かはるはるをしれとも見せがほに年をへだつる霞成りけり
- 延宝 四 くる春は峯の霞をまづ立て谷の笥をつたふなりけり
- 延宝 五 こぜりつむ沢のこほりのひまみえて春めき初る桜井のさと
- 延宝 六 春あさみすゞの籬に風さえてまだ雪きえぬしがらきの里
- 延宝 七 はるに成桜が枝は何となく花なけれどもむつまじき哉
- ⑭延宝 八 過て行は風なつかしき鶯よなづさひけりな梅の立枝に
- 延宝 九 鶯はいなかの谷のすなれどもたびなる音をは鳴ぬ成けり
- 延宝 一〇 かすめども春をはよその空にみてとけんともなき雪の下水
- 延宝 一一 春しれと谷の細水もりぞ行岩間のこほりひまたえにけり

⑭八番の歌が、細川本等の諸本には不載であるが、他の諸本には載っている。但し、日大本は行間補入の印を付して「初春」歌群の後に同筆で、天理本は「二本」と注記して行間に朱で、東奥本は「初春」歌群の後（「丁裏の右端」）に、それぞれこの歌を補入している。いずれであつても不自然ではなく、いずれが本来的か判然としない。同じ「初春」と題して一括されている一番く六番、一〇番・一一番の内容や表現を照らし合わせるに、点線を施したように、二首ずつ相互に関連を持って繋がりが続いているが、さような密な配列の窺える歌群の内の一首であることを考えると、「桜が枝」（七番）から「鶯」（九番）へ並ぶ細川本等の本文より、花のない「桜が枝」（七番）からまだ花をつけない「梅の立枝」（八番）へと並ぶ延宝本等の本文のほうが、飛躍がなく、適切である。

月前無常を

⑮延宝三九六 月を見ていづれの年の秋までか此世の中にちぎり有らむ

延宝三九七 あはれともころに思ふ程斗いはれぬべくはいひこそはせめ

延宝三九八 世間をゆめと見るく^くに哀にもなをおどろかぬ我ころ哉

延宝三九九 さくら花ちり^りくに成木の本に名残をおしむ鶯のこゑ

延宝四〇〇 消ぬめり本のしづくを思ふにも(落字)誰かはすへの身の

身ならぬ

延宝四〇一 津の国の難波の春はゆめなれや芦のかれはに風わたるなり

細川本等の諸本には、他の諸本に載る⑮三九六番の歌が載らない。但し、その内の日大本は、詞書を「無常」とし、右傍に「月前」という字句を、行間に「月を見て」の歌を、それぞれ同筆で補っている。「月前無常を」とある詞書の「月前」に内容が合うのは「月を見て」の歌のみである。その点で、「月前無常を」の詞書の許でこの歌を掲げている他の諸本のごとき本文が妥当である。尤も、この歌が載る本文にも、同じ詞書の掛かる二首目以下の歌が「月前」には合わない内容であり、不審はあるが。

前節の検討において、延宝本等の諸本より適切な本文を有することが確認できた葉室・国学・李花・吳天・東一・共立・東史・伊長・昌平・東急・中央・慶応・細川・日大・天理・天文・東奥・書陵の諸本は、例⑭⑮の二首の歌が載る葉室・国学・李花・吳天・東一・共立・東史・伊長・昌平・東急・中央・慶応の諸本と、この二首が載らない細川・日大・天理・天文・東奥・書陵の諸本とに区別できる。いずれが本来的かについては、決め手はないが、葉室本等の諸本のごとき本文のほうが適切であると判断される。

四

細川本等の諸本が不載である前掲の例⑭⑮の二首の歌を載せる点で、延宝本等の諸本と葉室本等の諸本とが合致することになる。この事実から、前述した例①から⑮までの諸例における延宝本等の諸本の所載歌の乱れを、葉室本等のごとき本文から延宝本等のごとき本文へ、という本文変化として捉えられる。その想定は、次に掲げる諸例に見られる延宝本等の諸本と葉室本等の諸本の内の慶応本との関係からも認められる。すなわち、

(「恋」部、詞書なし)

⑯延宝三三二 かゝる身にいとまほしき世なれども君がすむにもひかれぬ
る哉

葉室三三四 かゝる身におほしたてけむたらちねの親さへつらき恋もする哉

葉室三三五 とにかくにいとまほしき世なれども君が住にもひかれぬ

かな

の二首となつている。諸氏が指摘されるように、「かゝる身に」から「いとまほしき……」へ、初句の「に」によって目移りし、繋がつたものと見てよい。

⑰葉室五八七 谷風はみを吹きあけている物をなにと風の窓たゞく覽

⑱葉室五九六 しほかぜに伊勢の濱荻ふせば先穂すゑを波のあらたむる哉

の二首の歌は、「述懐の心を」(雑)の詞書に括られた歌群の中の二首で、それぞれ、山里の侘びしさを詠んだ歌が並ぶ小歌群の一首目として、「波」を詠んだ歌が並べられている小歌群の四首目として、掲げられているものである。二首とも延宝本等の諸本と慶応本は不載である。延宝本等の諸本の内の石川本は巻末落丁のため「しほかぜに」歌の載・不載が判然

としないが。

五

『西行法師家集』管見諸本について、諸伝本の大別グループ分けに關する所載歌と歌順の吟味を提示し、その本文關係を検討した。その結果から、管見諸本は、所載歌の差異によつて、

○延宝・三原・東二・河野・岩國・犬井・石川・和学・山内の諸本

○葉室・国学・李花・吳天・東一・共立・東史・伊長・昌平・東急・中央・慶応の諸本

○細川・日大・天理・天文・東奥・書陵の諸本

の三群に分けられることを確認した。また、所載歌の点で、葉室本等の諸本は延宝本等の諸本や細川本等の諸本に比べて妥当な本文であること、延宝本等の諸本は葉室本等の諸本や細川本等の諸本とは大異があり、そのうち、葉室本等のごとき本文から欠脱がかなり生じた本文であること、細川本等の諸本は葉室本等の諸本にほぼ合致するが、別に二首の欠脱が生じた本文であることを明らかにした。延宝本等の諸本における欠脱のばあい、葉室本等のごとき本文から延宝本等のごとき本文へ、目移り等に起因する単純な誤脱が想定されるものがある。細川本等の諸本における欠脱のばあいは、その原因は明らかでないが、後人によつて意圖的に除かれた、という可能性が考えられるものであり、葉室本等の諸本と細川本等の諸本との關係が単純ではないことが想像せられ、注意される。

〔注〕

- 1 高城功夫氏『山家集』諸本の研究(一)『東洋大学大学院紀要』七 昭和四十六年三月(『西行の研究』伝本・作品・享受)笠間書院 平成十三年三月に再録)
- 2 寺澤行忠氏『西行上人集伝本考』『経済学部日吉論文集』(三五) 昭和六十年三

月)、『西行集の校本と研究』所収「西行上人集」の「研究編」(笠間書院 平成十七年二月)

3 底本の延宝本によつて『西行法師家集』の部類を示すと、「春」(一番〜二八番)、「夏」(二九番〜一六三番)、「秋」(一六四番〜二七二番)、「冬」(二七三番〜三一〇番)、「恋」(三一一番〜三七〇番)、「雜」(三七一番〜五八九番)である。底本と他本とで部類に相違はなく、天文本等の「春部」などと表記する本や、昌平本等の部類名の欠脱箇所のある本がある程度である。

4 「右の三首は、相互に全く關係のない歌で、詞書も最初の歌にのみ掛かるのである。「とあり」の語も、諸家に指摘されている如く、後補を思わせるものである。第二首目は『西行物語』や謡曲などにも見出され、第三首目は『残集』(書陵部藏乙本)に、(本文引用アリ、略)とあるものである。(注2前掲書)

5 「五九〇詞 この詞書以下、延宝二年版本およびその写本以外の伝本には載らない。末尾の「とあり」は、この集の詞書の中では、異例「五九一」の歌、五九〇番の詞書に合わない。詞書を脱したか(「五九二」の項、「五九一」項と同内容)(大井善壽氏『西行法師家集(延宝二年版本)』私家版 昭和六十二年十二月)

6 寺澤氏が、葉室本等の他本のごとく排列される方が「さしのほる」「すみのほる」という語句の類似からすると「歌集として整った形を示すことになるであろう」(注2前掲書)とされる。

7 寺澤氏が「四首(葉室本の歌番号で言う)と、二六一〜二六四)は「鹿」の題の下に一括される歌であつて、「田家鹿」の題の下に詠まれた」「小山田の」(葉室二六五)が「それに続くべく、本系統(延宝本等の諸本)の排列は明らかに誤りである」(注2前掲書)と述べられる。

8 例えば、春部のばあい、「初春」「鶯」「霞」「社頭體と申す事を……」「子日」「若菜に初子の合ひたりしに……」「雪中若菜を「雨中若菜」若菜述懐を」「住み侍りし谷に鶯の聲せず成りにしかば……」「梅に鶯の鳴き侍りしに」「旅宿の梅を」「……隣の梅の散り越しを」「雉子を」「霞中帰る雁を」「帰雁を長樂寺にて」「帰雁」「燕」「梅」「柳風にしたがふ」「山家柳を」(以下省略)と題される歌が一首または二首以上群をなして順に並んでいる。

9 大井氏が延宝三九七〜四〇一の歌について「詞書内の「月前」に合わない。詞書を脱したか」(注5前掲書の「補注」とされる。

10 寺澤氏が「目移りによる誤写であることは、明らかである」(注2前掲書)とされ、大井氏が「二首(葉室三三四・三三五)を、初句の「に」によつて目移りした結果、誤ったもの」(注5前掲書の「補注」とされる。